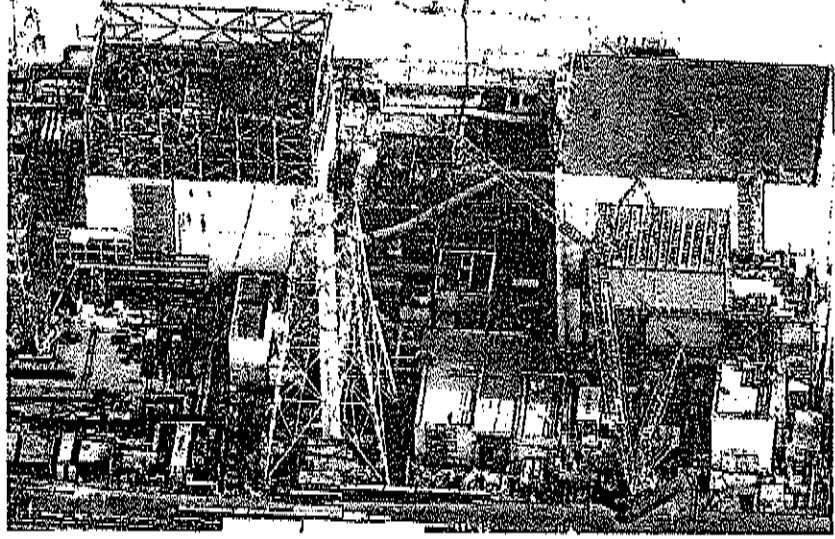


取材班は1号機と2号機間にある排気筒の根元近くを歩いた＝本社ヘリ「おおづる」から



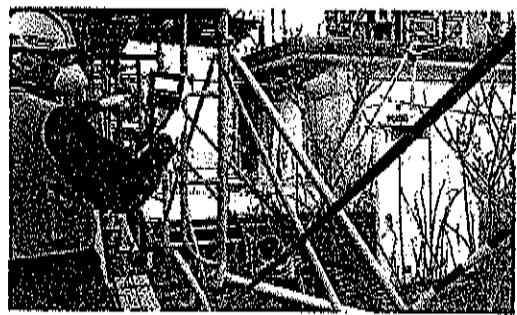
# 福島事故11年 現場ルポ

## なお高線量

# 廃炉険しく

東京電力福島第一原発（福島県大熊町、双葉町）で原子炉六基のうち三基でメルトダウン（炉心溶融）が起きた世界最悪レベルの事故から、まもなく十一年となる。ウクライナでは原発がロシア軍に攻撃され、核リスクの懸念が浮上したが、福島第一では今も高い放射線量が収束作業の行く手を阻む。本紙取材班は二日、建屋外では最も線量が高い場所に近づいた。（小野沢健太、地上からの写真は山川剛史撮影）

### 排気筒根元 数時間で死ぬ値



東京電力の広報担当者が線量計を、2号機排気筒根元に向けて、最大で毎時528Bq/hを記録した。いずれも福島県の東京電力福島第一原発で

■手付かず  
「ここは素早く通り過ぎます」。1、2号機の間にある排気筒の根元を通る際、東電の広報担当者が大声で言った。排気筒は事故当初、原子炉格納容器の破裂を防ぐため、極めて高い濃度の放射性物質を含む蒸気を排出（ベント）した。根元に近い接続部の線量は毎時約四・三Bq（二〇二〇年二月調査、一基は一Bq/hの百万倍）。その場に数時間いると、人は確実に死ぬ。

高さ半分、六十センチに解体された排気筒のそば、落下物対策の屋根付き通路を歩く。1-4号機間には汚染した地面の放射線を遮るために厚い鉄板が敷かれていたが、排気筒周辺だけは風景が違ふ。ススキが茂り、太い幹の木もあった。人がとどまらず作業できないことを物語る。

「五二五」。線量計の数値を読み上げる東電社員の声が上ずった。最大値は毎時五二八Bq/h。二時間弱で、一般人の年間被ばく限度に達する水準だ。足を止めて排気筒につながる直径約二十センチの汚染配管を見上げてみると、「なるべく早く」とせかされた。

一分足らずで通り抜けて線量計を見ると、毎時三〇Bq/h。ほっとしたが、この数値も放射能で汚染されていない場所の六百倍だ。

東電は三月二十四日、汚染配管の除去に着手。大型クレーンでつり上げた切断装置を使い、遠隔操作で配管を切る作業は難航している。この日、二度目の挑戦で配管を切り始めたが、途中で切断器具が壊れた。

■準備中々  
5、6号機前の護岸近くの敷地は、汚染水を浄化処理後の水の海洋放出に向けた設備の整備が進む。新造する海底トンネルの入り口となる立て坑（深さ十六メートル）が掘られた。昨年十二月に来た時は更地だったが、わずか三カ月で幅七メートル、長さ十メートルの大きな穴ができ、底で重機が掘削していた。

1、2号機排気筒近くの作業員は白い防護服で顔全体を覆うマスクをしていたが、ここでは通常の工事現場と変わらず軽装の作業服にヘルメット姿。線量も毎時〇・三Bq/hと、除染後に人が住んでいる場所と変わらない。放射能汚染がいかに作業の進み具合に影響しているのかを実感した。

東電は来春に処理水の放出開始を目指して着々と準備を進める。一方で、放出に反対する漁業関係者らの理解は得られていない。

五時間半の原発構内の取材で、記者の被ばく線量は四三・九Bq/hだった。

### 東京電力福島第一原発の事故収束作業の工程

2019年12月の中長期ロードマップなどに基づく  
東日本大震災、事故発生

2011年	1～3号機がメルトダウン（炉心溶融）。4号機は定期検査中で原子炉に核燃料なし。5、6号機は定期検査で停止中も原子炉に核燃料があり、9日後に冷温停止状態に
3月11日	
12月16日	野田佳彦首相（当時）が全原子炉の「冷温停止状態」を宣言
14年	4号機使用済み核燃料プールから核燃料1535体の取り出し完了
12月22日	
21年	3号機使用済み核燃料プールから核燃料568体取り出し完了
2月28日	
22年内	2号機で溶融核燃料（デブリ）の試験的取り出し開始
23年春	タンクで保管する汚染水を浄化処理後の水の海洋放出開始
24～26年度	2号機使用済み核燃料プールからの核燃料取り出し開始
27～28年度	1号機使用済み核燃料プールからの核燃料取り出し開始
31年内	全号機で使用済み核燃料プールからの核燃料取り出し完了
事故から30～40年で廃炉完了が目標	
未定	全てのデブリを取り出す方法 汚染された原子炉や建屋の解体

事故から30～40年で廃炉完了が目標

未定 全てのデブリを取り出す方法  
汚染された原子炉や建屋の解体